

コミュニケーション・アゴラ

コミュニケーション・アゴラでは以下の3人の演者により行われた。

司会 鈴木 陽一 (早稲田大学高等学院)

1. 精神障害者バレーボール競技の今後の普及と方向性について
～ルール制定や地域実践の取り組みから～

司会 横沢 民男 (国土館大学)

2. バレーボールの競技者育成システムについて

司会 篠村 朋樹 (木更津工業専門学校)

3. バレーボール文献データ・ベースについて

田所 淳子 (高知県立精神保健福祉センター)

一柳 信幸 (高知市役所)

伊藤 雅充 (日本体育大学)

黒川 貞生 (女子美術大学)

精神障害者バレーボール競技の 今後の普及と方向性について ～ルール制定や地域実践の取り組みから～

田所 淳子 (高知県立精神保健福祉センター)

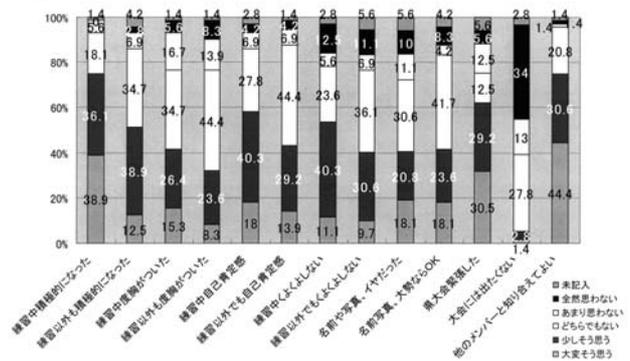
キーワード：精神障害者、生活の質、ローカルルール、競技性

【はじめに】2001年(平成13年)から、国民体育大会の後に、身体・知的障害者が参加する「全国障害者スポーツ大会」が開催されるようになった。これは1965年(昭和40年)から開催されている全国身体障害者スポーツ大会と1992年(平成4年)から開催されている全国知的障害者スポーツ大会が統合され、公的な大会となったものである。精神障害者も障害者基本法上、先の二障害と同等の位置づけであるにもかかわらず、スポーツに関して地域での普及・振興にも格差があり、全国大会の歴史もなかったことから、第1回の公的大会には参加できず独自の第1回精神障害者バレーボール大会を開催したにとどまった。しかし翌年2002年(平成14年)「第2回全国障害者スポーツ大会」のオープン競技として精神障害者バレーボール競技が開催され、選手の活躍ぶりが全国関係者の間で話題になり、徐々に各地での取り組みや意識が高まりつつある昨今である。

【高知県における調査から】演者らは2002年(平成14年)、「生活のしづらさ」を障害として持つ精神障害者がバレーボール競技を行うことで、身体面・精神面や生活の質、社会参加の面でどんな変化をもたらすか、また周りの関係者はバレーボールが精神障害者にどのような影響を与えていると考えているのか等、高知県大会(2002年：平成14年6月開催)に出場した選手(72名)・監督(16名)に対し質問紙による調査を行った。調査項目は生活・身体面や心理面的変化等多岐にわたるが、その結果からは(一部抜粋)選手達は「練習をすると毎日の生活にメリハリが出て」「練習が楽しい」「他の選手と知り合いになれ」「練習中も

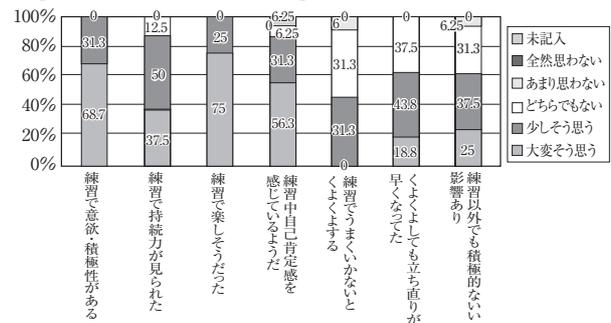
心理面について(精神障害者本人N=72)

- ①他のメンバーと知り合えてよい ②練習中積極的になった ③県大会緊張した
④練習中自己肯定感 ⑤練習中くよくよしない



メンバーの心理的变化(指導者N=16)

- ①練習で楽しそうだった ②練習で意欲・積極性がある
③練習中自己肯定感を感じている ④練習で持続力がみられた

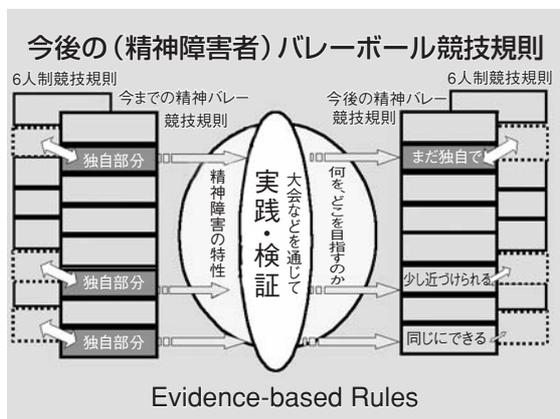


自己肯定感を感じる」「失敗してもくよくよしなくなった」「練習以外でも人間関係づくりに役立つ」「これからもバレーボールを続けたい」と考えている結果が得られた。また、指導者は「選手は障害があっても課題に取り組み」「選手の前向きな姿勢が見られたように感じ」「大会に出ると決まってからは更に姿勢が変わった」「練習では身体・精神的負荷に配慮は必要だが」「選手は練習を楽しんでいるように見られ」「意欲や積極性が見られた」「人間関係づくりにも役立つというような二次的効果も見られ」「バレーボールは相互協力による種目である」と考えている結果が得られた。

これらのことから、精神に障害を持つ人がバレーボールを行うことは、社会参加・活動の経験を広げ、チーム種目であるバレーボール競技から「楽しみ」や「協力すること・助け合うこと」を身体で学び、大会に参加することが緊張はするが新しい経験への「動機付け」となり強化され、「自己実現」を果たしていく、ということが推察される。

【競技規則について】先に述べたように、精神障害者バレーボールの全国大会実績も2年を過ぎ、その間、主催者・関係団体は競技規則を検討してきた。それまで、精神障害者バレーボールは都道府県、地域において独自のローカルルールを用いプレーしている実態がある。全国大会競技規則は6人制国際競技規則を基本とはしているものの、ボールの仕様(ソフトバレーボール使用)やネットの高さ(2m)、フリーポジション制の採用など、精神科疾患に対する服薬の副作用からくる身体負荷や、障害特性を考慮した変則版であり、「6人制とソフトバレーボールの折衷ルール」状態である。種々の点を考慮すると6人制を基本とすることがよりよいのでは、と思われるが、今後、公的な全国大会で競技性を追求する試合が行われていく場合、どこまで競技規則を整備していくのかは検討されねばならない。

演者らは第2回全国大会の事務局としても競技規則の制定に関わってきたが、第1回大会での変則部分は、第2回大会の試合状態や審判団からの意見、選手らの意見を参考に、また公式記録から正式規則に近づけていける部分があると考えた。例えば、選手交代は、心身の負荷を考え「何度でもできる」としていたが試合記録からは1セットにつき6回以上交代しているチームはなかった。このように「どの部分が本来の競技規則と同じにできるのか」「どの部分はまだ譲れないのか」「それはなぜか」「今後の見通しはどうか」などを「実践・検証」を通して明らかにしていきながら(Evidence-based Rules)今後、一層、精神に障害を持つ人もバレーボールを楽しめる社会を目指していきたいと考えている。



バレーボールの 競技者育成システムについて

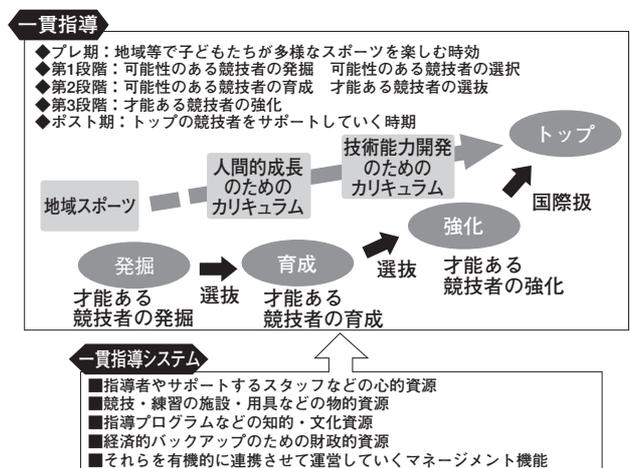
伊藤 雅充 (日本体育大学)

キーワード：一貫指導、発掘、育成、指導者、
スポーツ文化

発表では競技者育成プログラムの考え方を紹介した。今後日本を代表し、世界で戦う競技者は、優れた競技能力を有しているだけではなく、バランスのとれた豊かな人間性を有していることが望ましい。このような競技者を育成していくためには、これまで主流であった「優秀な選手を選抜して強化する」という考え方から、ジュニア期からトップレベルに至るまで、さらには競技者のセカンドキャリアまでをトータルにとらえ、一貫した指導理念や指導方法にもとづいて競技者を育成・強化していくという考え方への発想の転換が必要である。言い換えれば、受動的な強化策から能動的な強化策への政策転換である。

一貫指導の概念において非常に重要となるもののひとつが選手の発掘の問題である。子どもたちが地域で多様なスポーツを楽しめる環境を作っていくと同時に、その中から可能性のある競技者を発掘する。ここで注意しなくてはならないのは、一貫指導システムの考えは早期にタレントを発掘し英才教育を施すというものではなく、どの時期にあっても才能ある競技者はルールに乗ることが可能である。様々な段階において発掘や選抜が行われるわけであるが、現時点ではその方法論が未熟であるといわざるを得ない。方法論がなければタレント発掘は暗闇の中で黒猫を見つけるようなものであり、今後タレント発掘の方法論についての研究が必要とされる。

現在の中学校や高等学校の競技大会を見る限り、ゴールデンエイジ期にある競技者が適切な刺激を得られているとは言い難い。できる限りトーナメント制を改め、リーグ制にするなど、抜本的な改革が必要と考えられる。また、中



学3年生、高校3年生の“引退”も問題である。これからという競技者に引退は必要ない（少なくとも“引退”という表現は不適切）。それぞれの時期に適切な刺激が与えられるような政策を考えなくてはならない。

競技者育成プログラムで最も重要なのは指導者養成であろう。競技者は勝手に育つのではなく、育つのを待っていたら永久に待ち続けなくてはならない。適切な時期に最適な刺激を与えられる指導者を育成または再教育することが急務とされる。常に世界をスタンダードにし、全国の指導者が課題や育成のビジョンを共有し、指導者個人のエゴを捨て、競技者を第一に考えていくことができれば、結果は自ずとついてくるのではないだろうか。「学ぶことをやめたら、教えることをやめなくてはならない。」この言葉を我々大人が肝に銘じ、公の場での議論を通して、子どもたちに夢が与えられるようなスポーツ文化を形成していこうではないか。

バレーボール文献データ・ベースについて

黒川 貞生 (女子美術大学)

キーワード：バレーボール、文献、データ・ベース

バレーボールに関わる国内の文献の整理はこれまでも何人かの研究者によって行われてきた。しかし、その内容は著者名、タイトルおよび出典（雑誌名等）の列挙程度に留まっている。バレーボールに関する新しい研究に取り組もうとした場合、その研究テーマに関して、どこまでが明らかとされており、どこまでが不明確であるかを理解するために先行研究を調べるステップを踏む。このステップが十分でないために、既に先行研究で行われた同様の研究が歳月を隔てて行われるケースが少なくないように思う。この原因は、バレーボールに関する文献のデータ・ベースが存在しないことも要因としてあげられる。

バレーボール学会では、今後のバレーボールの科学研究を飛躍的に推進することを目的として、バレーボールに関わる国内外の文献のデータ・ベース作成プロジェクトを

立ち上げた（予算は10万円）。本年度は文献の複写、パソコンへの必要な情報の入力、PDF化を主たる仕事として、プロジェクトを推進した。現在およそ1,500件の文献の収集と入力完了している。しかし、その文献が掲載されている雑誌名、その雑誌の発行年度あるいはそのページ等のデータが欠落しているものも少なくはない。

2003年度は更に文献数を増やすよう努めると共に、バレーボール学会のホームページから、バレーボール学会会員が、著者名、キーワードあるいは雑誌名で文献を検索できるシステムを開発する予定である。また、欧文文献についても更に収集し、文献データ・ベースに各情報を蓄積し、諸外国ではどのようなバレーボールに関わる研究が行われているかが容易に調べられるようにしたいと考えている。

以下に文献データ・ベースへ各情報を入力しつつ感じたことを列挙する。

- ①例えば、日本体育学会等で発表はしたが、そのまま、原著論文となっていないケースが非常に多い。
- ②いろいろなルートで収集した文献のコピーを元に、パソコンへ著者名等の情報を入力するが、かなり過去の文献では出典等が不明な文献が多い。
- ③文献を収集し、パソコンへの情報の入力は極めてシンプルな作業である。しかし、どちらの仕事もかなり時間要する。一人でも多くの協力者を必要とする。
- ④常に最新のデータ・ベースとなるように更新するためには、このプロジェクトは今後も継続的に行う必要がある。

バレーボール文献データ・ベースが開発されることによって、先行研究の調査が極めて短時間で出来るようになるはずである。これにより、バレーボールに関する科学的研究は飛躍的に進むと考えられる。ひいては、バレーボールの普及・強化に貢献できると思われる。

バレーボール文献データ・ベースの作成はプロジェクト研究として発足したが、実際には一人で行ってきた。充実したデータ・ベースを作成するにはより多くの協力者が必要である。このプロジェクトに興味のある方は是非ご協力して頂きたいので、以下のメールアドレスにご一報ください。(sadao.kurokawa@nifty.com).



総合司会者 亀ヶ谷純一氏